

黒い門

経済学部
経済学科 2年

佐藤 万里人

僕は自殺したはずなのにまだ、意識があるよう
で：目を開けると黒い門のそばに立っていると感
じた。もしかしたら、私の潜在意識の中に落ちた
のかも知れないが、ここは映画の世界じゃない。
かといって「現実の世界か」と問われても「分か
らない」としか言いようがない。ただここに「い
る」という感覚だけがある。それにその黒い門に
寄りかかりながら煙草をくゆらせている男がいる
のが僕には見える。上等そうな3つボタンのスー
ツを着込み、退屈そうにしている。私はとりあえず、
彼に話しかけようと近づいた。するとそれに気づ
いた彼は、ぱつと顔を上げ私の方を見た。彼の目
が青くてとても綺麗だったので、彼の方へ歩み寄
りながら内心緊張していた。彼の元に着くまで彼
は私から目をそらさなかった。

「あの……ここはどこですか？」

と彼に聞くと、にやつとして煙草を吸って、ゆつ
くり吐いてからこう言った。

「天国でも地獄でも仮想（イメージ）でもない」と

ころさ。」

それじゃここはどこなんだろう……？」

「……あなたは私が死んだことはご存じで？」

「ここに来るやつは死んだ奴くらいさ。それに自
殺でね。君もその口だろう？」

「……はい。」

「まあそうだろう。君はどうして自殺したのさ。

まだ若いじゃないか。」

そう……僕はまだ若い。大学卒業の間近の23歳で
ある。1年浪人していたため、人より1つ歳が多い。
しかし、日本ではそれなりに名の知れた大学に入
学した。そして、それなりに良い成績だった。

そんな僕が自殺に至ったのは、この不況時期の
就活だった。自分の希望する職からはことごとく
見放され、やりたくもない職へ面接に行く途中の
駅のホームで思ってしまったのだ。「この電車で私
の未来に殺される」のか、と。だったら「今こい
つに殺されても同じだろ？」と。そして出勤ラッ
シュの列をかき分けて、電車がホームに入る時に

線路に向かって飛び込んだ。

「……というわけで……はい。」

「で、今ここにいるわけだ。」

「はい。」

「うん、そうか。それは問題アリだね。」

「まあ、問題アリですね……ラッシュ時にみんなに
迷惑かけちゃったし……せつかく育ててくれた親に
だって、申し訳ない事をしたな。」

「そういうことを言ってるんじゃない。問題なの
はその自分から逃げてしまったからだ。」

「……確かに目の前の現実からは逃げましたけど、
それはそれで良いでしょう？もう生きる希望が見
いだせなかったんだから。」

「……そこが問題なのだぞ、若者よ。君という存在が
世界から消えてしまったら誰が『君』を通して世
界と対峙するんだい？」

この質問に私は閉口してしまった。確かに、誰
でもない自分でしかない自分が世界から離れてし
まっては、世界と対峙することさえも出来なくなっ

てしまう…。

「言いたいことは分かります。けれど、状況が状況だったし…。」

「状況が変わるのは今かもしれないし、後1時間かも知れないのに？もしかしたら明後日かも、1年後かも、30年後かも知れないのに？もちろん一生その状況が変わらないということがあるかも知れないけれど、それを今で終わらせてしまうのはどうかと思うがね。」

「もし1時間待って変わると分かっていたら、僕だってこんな事はしないさ。」

「分かっていたらねえ…。今を精一杯生きていくとしない人間にそんなこと言われてもね、全く心に響かないし、絶対そんなことはないと言いたくなるよ。」

もちろん私が今を精一杯生きてこなかったことに反論はない。本当はこんなことしたくないと思いつつ、そう思っている自分を殺して状況に身を任せていたことは否めない。

「けれど…今を精一杯生きようとすると、生きづらくないですか？」

「かも知れない。その自分と状況の中の自分との距離は埋まることはない。けれど、それを見つめ続けたいといけないと私は思うんだが。」

「その不条理に苦しめと言うんですか？」

「そういうことだ。分かっているじゃないか。何故そこから逃げ出す必要がある？」

「その距離に近づかれちゃうからです。」

そういうと彼は、煙草をポケットから取り出してそれに火を付けた。そしてその煙をたぷりと吸い込んで、またしても人の心を射るような青い目で私の目を見た。今度もその視線に動揺はしたがしかし、じつと彼の目を見つめ返すことが出来た。

「距離に近づかれるね。ここに来る奴でそんなこと言う奴はいなかったな。そんな君にプレゼントをしてあげよう。」

「プレゼントですか？この場で何をもらっても何も感じないと思いますけど…。」

「いやいや、プレゼントといつてもものチョコレートとかお金とかじゃない。こいつだ。」

と言って、彼は黒い門を拳で叩いた。

「その先に何が…？」

「世界がある。」

「何のための？」

と、僕が言うと彼は表情を難くして攻撃的な面持ちになり、強い口調でこう言った。

「君は世界を知っているのか？」

「知らないことはないが、知っているともし言い難い…と思います。」

「そうだろう？それが世界との距離だ。」

「じゃあ…もうここで知ってしまったのに、その門を開く必要がありますか？」

「ああ。私は、そこに距離があることしか分からなかった。けれど、それが終わりではないことは知っている。」

「へえ、おじさんはすごい人だったんだ。終わりじゃなくて、その先に何かがあると思っていたんですか？」

おいおいおじさんなんて呼ばないでくれよ、という困ったお茶目な顔をしてから、真剣な顔で言った。

「生きる喜びさ。」

と彼は言った後、煙草を吸うわけでもなく手に持っていたマッチをこすって火を付けた。ぱつと燃え上がるマッチは火薬の匂いを煙に織り交ぜながらメラメラと燃えている。そして、彼の指元あたりまで火がくると、だんだん火力は萎んでゆき、終いには急にその光を消して、自分が燃えていたことを僕と彼に見せつけるようにしばらく黒こげの焼け跡から煙を上げていた。その煙が完全に消えた後、彼はそれをどこかへ放り投げた。

「このマッチは自分の知らぬうちに燃やされる。そして、消えることを感じながら、ついに消える瞬間がきてしまい、意識の外から消されてしまう。」

と先ほどまでの攻撃的な口調や面持ちとはうっ

てかわって、どこか寂しげで満足感に満たされた表情でそう話した。

僕は、それになんと答えていいのか、分からなかった。だって、あんなにじつとマッチ棒の燃えてからの一部始終を見ていたことがなかったものだから。

「この燃えていたマッチは、マッチでしかない。燃えることと同時に消えることがマッチの運命なのだ。もちろん人間のように考えることはできない。他者に燃やされ、自分の知らないところで消える。そんなことのために生まれてきたのだ。一本のマッチが悦びを得られることとはなんだと想う？」

「燃えること？」

「いいや、そうじゃない。今さっき燃えることと消えることは同義だと言ったばかりではないか。」

「そうでしたね…。では…燃やすこと？」

「うーん、それも違っていかないか？必ずしも対象がいるわけではないだろう？現に、今も対象がいなかったじゃないか。」

「じゃあ…。」

その続きが思い浮かばない。燃えることでもなく燃やすことでもないマッチの悦びは、一体どこにあるのだろうか。

「じゃあ、燃えていることを感じながら消える

こと。」

「なるほど。それだと、消えることが目的のようには聞こえるが。」

「けれど、燃えないように、消えないようになんてできないでしょう？」

「燃えなければ始まらないし、消えなければ終わらないからね。」

「じゃあ、何なんです？マッチの悦びって。」

そう問いかけると、彼は柔らかい笑顔を浮かべて僕を見た。その青い目は純粹で何一つとして濁りを感じさせなかった。

「マッチの悦びは…私たちが知ることができないんだ。もちろんマッチではないからと言うのもあるが、自分と違うものの悦びを知ることがは中々難しい。人間にだってそうさ。悦びを相対化するなんてことは馬鹿げている。普遍性もない。かといって、どっかの狂った宗教のように一つの救いを求めることが正しいなんてことなどない。あんなものは大衆を均一化しようとする馬鹿げた試みに過ぎない。司教になったって、高みを望むどころか神の死を仰いでいるようなものだ。」

「じゃあ、悦びって何ですか？」

「単純に『悦び』とは何かと言えば、私にだって皆目が見つからない。だから、我々は『生きる悦び』について考えようじゃないか。」

彼は、はなからこの話をしたがっている、この瞬間分かった。自殺をしてまでこんなに真面目に何かについて考えるようなことはしてこなかったから、なんだか嬉しくなった。それにしても、生きる悦びとは何なんだろう。

「君が生きている時に悦びと感じたのはどんなときだい？」

「そうですね…僕は何かに出出した才能のあるものがなかったから。でも、御飯を食べることだとか、好きな曲を聴くとかは悦びと言ってもいいのかな。」

「でも嫌いなものを食べたり、気分の悪いときに食べたりすることは悦びかね。静かにしたいときに聴くことや嫌いな曲を聴くことは悦びと考えられるかね。」

「いいや考えられないです。」

「そうだろう？そんな恣意的なものには悦びとは言わず欲喜と言って、何かを欲しないと得られないものなんだ。」

欲喜ね…初めて聞いた言葉だが、なんとなく言いたいことが分かる気がする。

「じゃあ、何かをほしいと考えてから湧き出るものに関しては、違うと？」

「違うと思うね。そんな変遷しうるものに人生を費やせるのか、君は。」

「分からない。じゃあ、あなたは愛も違うと？」

「愛は欲する対象じゃない。欲動とか欲情とかに間違えられることが多いけれど、最も欲から縁遠い存在なんじゃないかと私は思うがね。そもそも愛に悦びなど見つける必要がないだろう、もともと悦びがあるなら全人間がそれを自分のものになっているよ。さて、では何なんだと思う？」

「うーん：僕、今なんか思い出しました。朝早く目覚めよく起きて、御飯食べて、学校に行つて、真面目に授業受けて：その後、バイトに行つて、家に帰つて、ビール飲んで、気が付くと一日が終わっている時なんかは：幸せだと思いました。今日の俺、めっちゃめっちゃ頑張つたなつて思うとき、それが悦びと思えました：はい。いきなり熱くなっちゃいました。」

そう言つて、僕は自傷的に笑つた。それが彼にどう見えたのかは分からないが、寂寥感が溢れていたのだろう。彼はポケットから再度煙草を取り出して、啜えた。そして、僕に「いるか？」という感じでフィルターの部分を僕に向けて渡す仕草をした。僕は一度頷いて、それを貰つた。彼は僕の煙草にマッチで火を付けた後、同じマッチで自分の煙草にも火を付けた。

「そう笑うこともないさ。でも若造よ。君は自殺をしたんだぞ。一日を頑張ることがもうできない

じゃないか。その自殺しようとした時だつて、頑張つていれば君の言う悦びになつたかも知れないだろう？ 違うかな。」

「いいえ、違います。僕の中で『もういいでしょ？』と勝手に諦めていたんです。きっとそのときだけではないと思います。それに、人間って生きていくだけで少し何かに諦めを感じている、と思うことがよくありました。」

そうすると、彼は僕に近づいて方をぼんぼんと軽く叩いた。その慰めが：僕の涙の関を開いてくれたようで、僕はすらすらと涙を流した。自殺して、考えて、泣いて。生きているときにこんな風なことからこなかつたのが悔やまれる。

「：すみません。さあ、悦びについて考えましょう。」
と言うと、彼は『お：。』と喋って動揺していた。

「君は意外と精神が強いな。感心した。そう、今は悦びについて考えよう。それが分かつてきたら、この黒い門を開いてやる。」

「黒い門なんてどうだつていいさ。今はただ悦びを知りたいよ。」

「そうか、じゃあ続けよう。」

「不条理に苦しめと言つたあなたはどうなんですか？」

「不条理はな：プレリユードなんだ。今日一日はどうだつた？ なんて言葉は一番嫌いな言葉だ。私

たちは全員死ぬまでそのプレリユードの上にいるんだ。実存はそれをすつ飛ばして、いきなりポストリユードに向かつて話を進めている。飛躍しすぎなんだよ。どう思う？ ピアノのコンサートに行つて、いきなりクライマックスを弾かれて、しかもずっと同じ部分を弾かれたら。」

「それじゃあ、もういいよ、つて気持ちになりませよね。つてか、そういう哲学者いなかつたでしつたっけ？」

「ああ、いたかもしれない。この問題はな、馬鹿らしい概念に閉じこもるしか術のない古代から現代まで変わらない人間の罪なんだ。知識の共有とか、未来とか、過去とか。そんなことを考えているから、死に固執したり、生を消化しようとするんだ。馬鹿らしくてしょうがない。」

「そうですか：。じゃあとりあえず、プレリユード（不条理）の次が、生きる悦びつてこと？」

「そう考えている。君はどう思う？」

「そうだな：さつきマッチを燃やしたでしょ？ それから考えてみると：燃やした時点で、それが始まりであつて次であつて終わりでもある。さつきあなたは燃えることと消えることは同義だつて言つてたし：。それを人間で考えてみると：でもそういう感じでは人間に当てはめられないや。」

「なぜ？」

「だって、ただ生まれて生きてるだけじゃないし。生まれたてなんて何も考えられないじゃないですか。それに母親の感情と自分の感情の区別もできていないわけだし…。そうすると、自分を意識した瞬間が不条理ってこと？」

「それでもいいんじゃないか？自分を認識できた瞬間、他者も認識できるという論理になるからな、必然的に。」

「ですよね…。とうなると、意識をし始めた時点で、悦びが生まれるはず…。よくわかんなくなってきた。」

そう言つて僕は笑つた。

「笑いごとじゃないぞ、若造。」

と言いながら、彼も笑つている。

「悦びが生まれるはずとは、どういうことだい？先ほどのように欲喜からはじまる外在するものか？」

「どうなんでしょう。自分が悦びを感じる時つて、基本的に外の影響が強い気がするんですけど。」

「というと、君は理解できない他者、もつとと言うと世界から悦びを得ているのかい？」

「そうかも知れないです。」

「じゃあ、一生かかっても悦びがなんだかわからないと？」

「今の話の流れから考えると、そうなりますね。」

「それだと、プレリユードから一生抜け出せないことになって、私たちがこうし考えたことが無駄になるけれど、それが君の結論か？」

はつきりそうじゃない、つて言えばいいのに。

彼がなんだか可愛く見えてきたので、またしても笑つてしまった。が、あの青い目で見られると不安になるので、すぐに笑うのをやめた。

「いや、違ふと思います。つてことは、僕たちが

考える悦びつて僕たちの中にあるつてことですよね？」

「うん、そうなるな。」

「じゃあ、悦びを知るのは難しいですね…。」

「そうだな。」

先ほどから彼は相づちしかうたない。自分で答えを出せつてことかな。

「今思いついたことなので気にしないで聞いて下さい。永遠に理解できない自分と世界。それを見続けることから始まる生。そして、生きる悦びはその距離の中にあるのではなく、自分の中にある。

となると…悦びがあることに喜ぶしかできないんじゃないかと思ひました…はい。」

「随分とシンプルな答えだな。面白い。悦びは分

からないけれど、何かがそこにあると信じてそれに喜ぶと言うわけだな？」

「ええ、そうです。」

「だとすると、どつかの宗教みたいじゃないか？神がいることを信じて生きなさい、みたいな。それだと自分が神になっただけで、何も変わらないじゃないか。」

と言つて彼は笑つた。どれだけこの人は宗教が嫌いなんだろう。

「なるほどね…。いつかそれが分かるだろうつて信じ続けて、死ぬのが嫌いみたいだね。」

「ああ。なんで未来を考慮しながら生きる必要がある？」

「未来がないと、寂しいからですよ。明日がくるから頑張る。明日の自分のために頑張る。10年後の自分のために頑張る。だから今は苦しむ。それでいいと思ひますけど。」

「じゃあ、自殺した君は自分の考えに反する馬鹿つてことになるけれどな。違ふと思つたから死んだのだろう？違ふか？」

「ああ…そうでした。最初にあなたにそう言われたのを忘れてました…。じゃあ、なんなんでしょうねえ。」

「未来、未来つて言うけれど、光のある輝かしい未来を想像しすぎだと私は思うんだが…。未来は自分で選択するんだろう？明日のために何かをするつて言つたつて、選択するレベルまでいかなない考えで、結局のところ日常つてやつに落ち着くじゃ

ないか。君の言う明日は日常って言葉の間違いだと思うが。」

「なるほど、そうかも知れないですね。明日の為にとかいって、日常が崩れない為につて感じかも知れないです。そんな自分に(笑)ですね。」

「だから、どう思う？その未来ってやつも日常とか現在に含まれていると思わないか？」

「ああ、なるほど！そうかも知れないです！」

「何をはいでいるんだか。本当に君は若いな。」

「つてことは、今の為に生きると言うことですか？」

「まあ、君の考えをまとめていうとそうなるな。」

「でも、今のために生きるって難しくないですか？だって、今生きてるんだし、現在進行形の自分のために、なんてことし始めたなら、さっきあなたと言った欲望になっちゃう気がします。」

「本当に君自身が欲しているのが問題になるんだ。誰だって、生理的な部分に関しては無意識で欲するものだよ。だけど、悦びって言うのはそうじゃない。」

「じゃあ、なんだってんですか、さっきから！もったいぶってばかり！もううんざりだ！」

「言えないよ。だから私はこうして誰かがここにくるのを待っているんじゃないか。」

「そんな寂しそうな顔したってしょうがないじゃ

ないか！自殺してくる人のためにここでずっと待っていたって、世界は変わらないぞ！」

「知っているさ、そのくらい。ちなみに叫んでも変わらないと思うが。」

「そりゃそうだけども…もう、狂ってくるよ…地獄だ、これじゃ。」

「ああ、ここ地獄さ。自殺した人の為のな。そうやって君を苦しめることが私の仕事だ。仕方ないだろ？そう言っ、自分の良心に逆らって誰かを待っている、仕事をする自分が最悪で、私も自殺したいができない。私が一番苦しいんだ。」

「そんな弱音聞きたくもないね…。」

と、突然僕ははつと気づいたことある。彼の言葉に答えがあったんじゃないか？もしかすると、彼自身が体現していてくれるのかも知れない。

それが自分の罪だっことを気づかせてくれたいたのかも知れない。

「もしかして、悦びって自分の良心に逆らわないことですか？」

急に落ち着いた声になって僕が話し始めたので、彼は驚いていた。

「おお…やっとそのことに気が付いてくれたか！ああ、君という人を待っていたぞ！なんて奇跡が起きたんだ！すばらしい！」

「そうだったんですか…。良心に逆らわないこと

が生きる悦び…きつと難しいでしょうね。ここにくる前にそれが知れたかったです。僕が遅いなら…まだ生きている家族や彼女や友人にでも、できれば世界中のみんなに知らせしてほしいな…。」

そう言っ、この黒い門の前で天と言えない真つ暗な上方を見上げて僕は涙をこぼした。彼が見ていることも忘れて、泣いた。すると、彼は黒い門を押し始めた。とても力がいるようで、歯を食いしばって、頭の血管をぱんぱんに膨らませながら、踏ん張って開けようとしていた。それを見て、流れる涙をぬぐいながら手伝おうとした。すると、「君は手伝ってはいけないことになっているんだ。悪いが何もしないでくれ。」

「そんなことはできません。僕はあなたを手伝いたいんです！」

そう言っ、僕は彼の言うことを聞かずに、一緒に踏ん張りながら黒い門を押しした。二人がかりで体重を乗せて押しているのにもかかわらず、中々素直に黒い門は動こうとしない。

しかし、徐々に音を立てて動き出した。彼の顔を見ると真つ赤になっていて、汗がすごい勢いで流れている。僕も人のことを言えないくらい汗だくになって踏ん張っていた。

「若者よ、あと少しだ。光が見えたらそれに向かって飛び込め！現実の世界に戻るのだ！そして、自

分の良心に逆らうなよ！それだけは守ると、約束してくれ！さあ！」

「約束します！誓います！」

「その意気だ若者よ！さらばだ！」

そう言うと、黒い門の隙間から白い光が漏れてきた。僕は彼に言われたとおりそこに飛び込んだ。最後に彼の顔を見ると、満面の笑みだった。

…私は病室で酸素マスクを付けられた状態でベッドに横たわっていた。体中が痛い。でも、涙が出るほど嬉しい。生きてるって嬉しい。そう感じられただけでも、僕は幸せだった。そうだ、この身体が戻ったら、僕は喜びを得よう。

あの彼に感謝しよう。
まずそこからだ。